東洋史研究

北宋徽宗時代と首都開封

はじめに
1　徽宗の權威と蔡京の權力
a　時令論思想による皇帝權威の強化
b　星變に動搖する徽宗
2　道教（神霄派）の隆盛と艮嶽の造營
a　明堂と延福宮の建設と蔡京政權
b　神霄派の開封進出と上清寶籙宮
c　艮嶽の造營
3　首都空間の再編と居住者
a　景龍門と東華門街（北へ向かう首都の中心軸）
b　庶民生活と賜第
おわりに

久保田和男

第六十三卷　第四號　平成十七年三月發行

はじめに

中央集權的な國家は明確に首都を有し、首都は全國の政治的中心である。政治的中心の役割を果たすために、首都機能が首都に設定される。中國の場合は、華夷觀による世界秩序が支配の前提となる。その中心としての首都機能も要求される。ところで、首都機能は二つの範疇に分けることが可能だと思われる。

まず、一方の首都機能は、超自然的な方法によって人々に國家の權威を感じさせ、支配を納得させるものである。その目的のため、支配者は、首都に記念碑的な建造物を建造したり、宇宙論を平面プランに表現して權威を象徵させた。また支配を正當化する國家的な宗教儀式を擧行する施設を設けた(1)。他の都市にはないような繁榮を演出して、外國使節などの訪問者に「見せびらかし」た。それぞれ權威を象徵的に表現するので、隱喩的な形態をとる。これらの超自然的な、權威のための首都機能を、「聖」の首都機能と呼んでみたい。

聖に對して、「俗」の首都機能は、むき出しの權力で、人々に服從を強制する機能であり、合理的な統治システムである。中央集權國家では、軍事力・行政能力・警察力などを有效ならしむためのネットワークのセンターが首都に置かれる。これらを「俗」の首都機能と呼んでみたい。

隋の大興城は、シンメトリカルな平面プランによって、新たに建設された首都である。グリッド狀の平面プランが、宇宙論的な秩序を象徵し、權威のための首都機能を果たしている。計畫都市という出發點からして、聖の首都機能が優先された首都だった。

それに對して、開封は、唐代、宣武軍節度使の治所、すなわち地方軍閥の中心都市だった。五代に首都となり、軍事面の首都機能は發達したが、圓丘や太廟など、聖の首都機能は、洛陽に置かれ續けた。後周の太祖の晩年、聖の首都機能も開封に移され、聖俗の首都機能は開封に集中されることになる(2)。數年後、世宗は外城壁を建設する。隋の大興城建設が、

居住者の便よりも、宇宙論を表現することに熱中したのに對し、世宗は、居住者（禁軍兵士とその家族が優先された）の空閒を確保するという合目的・物理的な理由から、建設したのである。すなわち俗の首都機能を優先させた首都だった。北宋は各地の地方藩鎭を解體して中國に統一と秩序をもたらした。藩鎭の傭兵たちは、中央の禁軍に吸收され、安定した生活を約束された。そのために開封の大運河による漕運能力や軍營といった俗の首都機能が威力を發揮した。開封の人口の過半は、こういった軍人（禁軍）とその家族だった。(3)

王安石の改革では、在京禁軍は、祖宗の負の遺產として削減される。そのため、軍營の多くは廢墟と化してしまう。ここが、開封史における重大な轉機である。從來の首都機能が縮小したため、空き地が出現し、再開發が始まる。(4)その中から、『清明上河圖』(5)や『東京夢華錄』の舞臺となった徽宗時代の開封が出現したのである。

本稿は、如上の觀點から、すなわち政治の觀點から徽宗時代の首都開封を考察する試みである。ここで、簡單に本稿の構成を述べておきたい。讀者は回り道するような印象を受けるかも知れないが、最初に、徽宗時代の政治の特徵を宰相蔡京を中心に考察する。さらにこの政治の特徵が首都機能とどのように關わるのか分析する。結論を先取りするようだが、徽宗時代の政治方針は、「首都改造」といわざるをえないような變化を開封にもたらす。最後の一節では、「首都改造」で出現した新しい中心軸や、市民生活への影響などを紹介する。（本稿では頻出する楊仲良撰『資治通鑑長編紀事本末』を『紀事本末』と略稱する。）

1　徽宗の權威と蔡京の權力

徽宗、趙佶は、神宗の一一番目の子供である。元豐五年（一〇八二）、陳氏を母として誕生し、長じて端王に封ぜられた。元符三年（一一〇〇）、一月、哲宗が在位一五年、齡二五にして急死した際、嗣ぐべき子はいなかった。欽聖憲肅皇太后向氏（神宗の皇后）が、宰相たちに崩御を告げ、後嗣について意見を求めたところ、首相の章惇は、「禮律」に從って、同母

弟の簡王を立てることを進言した。それに對し、皇太后は、「神宗の諸子は、申王が年長であるが、眼疾がある。次に年長の端王を立てるべきである」とのべる。皇太后と章惇は、自説を相互に言い合って譲らない。章惇は、「端王はただの道樂息子です。」と批判したとも言われている。[6] そこに割って入ったのが、知樞密院曾布である。曾布は、章惇の意見は個人的な意見で、臣下を代表したものではないとし、皇太后を支持する。つづいて次相たちも、皇太后への支持をそれぞれ表明し、大勢は決した。皇太后は、「端王は、福壽と仁孝があり、諸王と同列ではない」と言う神宗の發言を紹介し、章惇も沈黙する。かくして徽宗は卽位した。[7] その後、向太后の垂簾聽政のもと、韓忠彦と曾布が左右僕射となり、新舊法兩グループの和合が圖られ、翌年一月、建中靖國と改元された。しかし、この月、太后が急死してしまう。徽宗は親政を開始し、父兄の遺志を繼いで新法政策をとることになった。翌崇寧元年（一一〇二）五月、韓忠彦は罷免され、司馬光や文彦博の官職が追奪される。元祐皇后は再び皇后の地位を奪われ、瑤華宮に居住させられた。七月には、曾布に代わって蔡京が宰相に就任し、王安石時代の條例司にならって、講議司が新設され、方田法など新法が次々と復活していった。[8] 蔡京は、神宗時代を經驗した新法派のベテラン官僚（「元豐の侍從」）として、宰相に登用されたのである。

しかしながら、蔡京は、徽宗時代を通じて一貫して政權を擔當したわけではない。あわせて四度、政權を擔當し、四度、政權の座から追われている。

1　第一次當國　崇寧元年（一一〇二）七月→崇寧五年（一一〇六）二月（四年半）→一年閒下野
2　第二次當國　大觀元年（一一〇七）一月→大觀三年（一一〇九）六月（二年半）→四年閒下野
3　第三次當國　政和二年（一一一二）五月→宣和二年（一一二〇）六月（八年閒）
4　第四次當國　宣和六年（一一二四）一二月→宣和七年（一一二五）四月（五ヶ月）

最後の第四次當國の際は、老齡で身體的に衰えていて、『鐵圍山叢談』で知られる末子蔡絛が公然と政務を代行していたという。本稿では、第三次當國までの期閒を考察の對象とする。ことに本節では、崇寧・大觀年閒の蔡京政權と皇帝の

權威について考察し、その特色を提示する。

a　時令論思想による皇帝權威の強化

第一次當國期における蔡京政權の政治手法の一つは、「紹述」の主張である。神宗時代の新法政治を受け繼ぐという立場である。そのため、神宗皇帝時代に計畫されたことを理由として實行された政策が多い。

たとえば、この時期、一種の社會福祉政策がさかんに制度化されている。[9] 崇寧元年（一一〇二）には、安濟坊と居養院が、開封府をはじめとして各州縣に置かれた。前者は、貧しい病人の治療にあたる施設で、後者は、寡婦や孤兒を收容する施設である。また、崇寧二年には、神宗時代に一カ所置かれていた惠民局という藥局が城内に增置され五カ所となり（後に和劑二局を增やす）、民衆に安價で藥が販賣された。[10] さらに、翌年、身よりのない死者の埋葬施設である漏澤園が設置された。これらの社會政策は、漏澤園をはじめとして、神宗が一旦實施した、あるいは計畫していたといわれる制度である。[11]『宋史』一七八、食貨志、振恤には、「糜費（むだづかい）藝り無く、率斂を免れず。貧者は樂しむも、しかれども富者は擾（わずら）う。」と評されている。

紹述主義とともに、皇帝權威を高めるために用いられたのが、儒教の經典に記されている古代の禮・樂であった。

崇寧三年（一一〇四）、道士魏漢律により九鼎の鑄造が提案され、蔡京の容れるところとなった。九鼎を作る時、古の法であるとして、徽宗の指の長さを基準とした。この基準は、新たに改定された樂律や、度量衡の基準としても用いられた。[12] 九鼎とは、元々禹が九の州から出てきた金屬で一つずつ作らせた鼎で、夏・殷・周と傳授された支配を象徴する寶器である。その後、印璽が權威の象徴となり、九鼎に關する信仰は薄れたが、のちに則天武后が鑄造させている。徽宗の九鼎は、崇寧四年八月完成し、九成宮に奉安された。[13]

そのほかにも、「圜土」（古代の牢獄）を築造させたり、[14] 太學を三舍にわかち、外學を周代にならって、辟雍と稱し王安

石を配享する。(15)

明堂の建造もこの一連の儒教的な禮樂重視の流れに位置附けられる。明堂とは、古代、天子が政治、儀禮、祭祀、教育など國家的な行事を擧行した場所である。夏では「世室」といい、殷では「重屋」といい、周では「明堂」といった。明堂の構造は、『周禮』や『禮記』に記載されており、學者によって解釋が分かれる部分があったが、周の政治を理想とする儒教道德を象徴する巨大建造物である。周を建國した則天武后は、九鼎を、神都洛陽に新築した明堂に安置する。(16)

崇寧四年（一一〇五）七月、蔡京等は、姚舜仁が作成した明堂の「繪圖」を進呈する。徽宗は、「先帝（神宗）、常にこれを爲らんと欲す」と發言し、翌八月建造が決定する。(17) しかし蔡京の失脚もあってこのときは完成しなかった。明堂が開封宮城の南東部に姿を現すのは、一〇年後の第三次當國期のことである。

九鼎にしても明堂にしても、王莽や則天武后といったいわば革命政權が、「正當性」を主張するために古典の世界から引っ張り出した「權威の象徴」である。蔡京は、これらの「革命政權」と同じように、權威の創造に驅られていたように思える。夏殷周の傳統を復興しようとして、却って「王莽已行之跡」を追いかけているという批判も受けている。(18)

小島毅氏は、九鼎・明堂などは、時令思想すなわち律曆的世界觀に基づくものとされ、「國都にある王宮こそ、世界の象徴的な中心であり、ここに時間的・空間的に宇宙を模した王權のシンボルを設置することによって、統治の正當性を主張する——九鼎と明堂とはこの同じ考え方に基づいている。それは、可視的・具象的な象徴を用いた王權理論であった。(19)」と述べている。

なぜ蔡京は、このように徽宗の權威擴大に取り組まねばならなかったのだろうか。林大介氏は、蔡京の政權は、御筆や講義司など、皇帝の權威によって政權の維持・政治運營がなされているので、皇帝權威を高めることが非常に重要だったと述べる。(20) この問題についての私見を次に述べておこう。

徽宗が、自身の權威に疑いをもち、したがって「紹述の政治」をするという自身の判斷に疑問を持ったとき、蔡京は失

脚する可能性があった。皇帝が自らの判斷に疑問を懷くきっかけは、一般には「人言」と「天變」である。

上、嘗って玉琖・玉巵を出だし、以って輔臣に示して曰く、朕、此の器を久つのみ、就ち深く人言を懼る、故に未だ用いざるのみ。

（蔡）京、曰く、事ただ當に理においてすべし。多言は畏るるに足らざるなり。陛下當に太平の奉を享くべし。區區たる玉器、何ぞ道うに足らんや。(21)

この崇寧初年の對話では、蔡京は、「理」によって判斷すべきである、「人言」は恐れるに足らないと述べ、徽宗を勵ましている。しかし、徽宗は「人言」や「星變」に動搖しやすい。すぐに自らの判斷に自信が持てなくなる。この章の冒頭で紹介した卽位にまつわる混亂が多少影響しているのかも知れない。そのため蔡京は、徽宗が無謬の聖性を保有し、「紹述の政治」を堅持してもらう必要があった。機會あるごとに、徽宗の權威擴大を企圖したことには、このような背景が考えられる。

b　星變に動搖する徽宗

宋代は儒學に新しい展開がおこった時代である。天は理であり、爲政者は理を窮めることによって、德による支配を行うべきであるという朱子學の天理論が確立していった。(22) 北宋時代は過渡期であり、天變を恐れるべきではないとする新しい考え方の一方で、傳統的な天譴論に據る立場も存在した。王安石は、人言・天變・祖宗は恐れるに足らないという「三不足の說」をとなえたと、反對派から批判されている。それに對して王安石は、蔡京と同じ論理で、人言や天變(23)に動搖しがちな神宗を勵ましている。(24)

ところで、徽宗が「人言」以上に恐れていたものが「星變」であった。そのため星變は、容易に政變に發展した。

崇寧四年（一一〇五）一〇月、「日中に黑子あり」という報告があった。(25) 太陽黑點が肉眼で視認されたのである。翌年正

月には、大彗星が都の西方の空に出現した。その尾は天空を横切るほどだった。[26] 徽宗はこの現象に對應して、常膳を減らし、直言を求め、大赦令を出す。ここまでは傳統的な對應である。[27] その上、徽宗は、「星變を懼れ」[28]「震動し、己を責め、深く京の姦を察し、これより旬日の間、凡そ京の爲す所のものは一切罷去」[29]した。朝堂の前に立っていた元祐黨籍碑は密かに破壞され、方田や市易司、當十錢など、十日の間に次々に廢止されたという。二月、蔡京は罷免され、これまで蔡京を批判していた趙挺之が右僕射に登用される。[30]

しかし、彗星が去ると、徽宗はやや氣持ちをゆるめる。その隙をついて蔡京は、「紹述」主義を與黨を使って吹き込み、大觀元年（一一〇七）一月、左僕射に復歸する。[31] 第二次當國期である。この時期は（二年半）、主に彗星が出現したときに自分の批判をした官僚の處分や、いったん廢止された新法政策の復活などに追われた。

趙挺之は三月失脚し、この年の五月に死ぬ。[32] 續いてライバルとなったのが張商英である。[33] この時點で生き殘っていた「元豐の侍從」は、張商英と蔡京だけだった。その張商英と結び、天譴論の立場から蔡京攻擊を繼續していたのが、郭天信という人物である。[34]

郭天信[35]は、開封の人で、「技」によって太史局に職を得ていた。太史局は、元豐改制以前は司天局と稱せられていた役所で、天文星曆を司っていた。彼の「技」とは、その方面の技術だったのであろう。徽宗が卽位する以前から、天信は、再三徽宗に對してその登位を豫言していた。それが現實のものになったゆえに、徽宗から異例の恩寵を受ける。位階は定武軍節度使、祐神觀使に至った。彼は蔡京の「亂國」を見て、徽宗から政治上の諮問を受けるときは常に天文現象を用いて批判していた。特に「日中に黑子あり」としばしば指摘していた。『宋史』郭天信傳は、郭天信の天譴論に基づく彈劾が原因で第二次當國期は終わりを告げたとする。

ただし、『九朝備要』二七、大觀三年六月、蔡京罷の項によると、郭天信の「日中有黑子」との報告とともに、御史臺の彈劾によって蔡京は罷免されたとする。『十朝綱要』では、郭天信の事は述べられていない。しかしながら、郭天信の

存在が、徽宗の天譴論への傾斜に影響していたことは確かであろう。

蔡京は、大觀三年（一一〇九）六月、尚書左僕射を罷免されたが、太一宮使として開封に居住することは許され[36]、哲宗實錄編纂を提擧した[37]。しかし、大觀四年五月丁未、ふたたび彗星の出現が報告される[38]。例によって、「避殿減膳」が宣言され、直言が求められた。數日たってから、蔡京は、太子少保致仕に降格され、開封外の地に居住することが命じられた[39]。四輔の造營が停止され、翌年の改元が決定し、方田も再び廢止された。

大觀四年（一一一〇）六月乙亥、蔡京が開封から去るのと相前後して、張商英が宰相となった[40]。この日、曇って彗星が見えなくなり、翌日は雨となった。そのころ日照りにも苦しんでいたため、徽宗は喜び、「商霖」の二字を揮毫して賜ったという[41]。

張商英は、蔡京の行った當十錢や直達法、鹽法などを元に戻し、徽宗に土木工事をやめ奢侈を愼むことを勸める。そのため徽宗はすぐに張商英のことを憚るようになった[42]。張商英は、御史臺からの彈劾によって、政和元年（一一一一）、四月、わずか一年餘で失脚し、知河南府に出されてしまう[43]。その後、張商英が中書省の機密情報を佛僧などを通じて郭天信に漏泄し、一方天信が徽宗の様子を伺い、その情報を張商英が受けて、政治を壟斷していたという告發があった。開封府での取り調べがおこなわれ、彼らの罪が確定する[44]。張商英は安置衡州となり、郭天信は安置新州となった[45]。

政和二年（一一一二）二月、已に太子太師致仕に戻されていた蔡京は、これまでの功績によって、開封に邸宅を賜る[46]。三月開封に至り、入見している[47]。五月には、致仕が落とされ、第三次當國期となる。この時は「太師」のまま都堂や中書省、尚書省をまわり、宰相の任を果たすように命じられている[48]。

『宋史』郭天信傳によると、郭天信が單州安置となると、監視役として宋康年が知州となった。宋康年は蔡京の腹心である（『建炎以來繫年要錄』七二、紹興四年一月辛未、參照）。さらに新州に遷されると、康年も廣東路に移った。天信は至ること數ヶ月で沒したが、蔡京は天信の異能を恐れ、康年に吏を派遣して棺をあけて確認させたという。かれの死と相前後

して、蔡京の第三次當國期が始まる。それは八年の長きに渡る。長期政權になった理由の一つとして郭天信の死を擧げることが可能であろう。天譴論を武器として對峙した勢力を克服した蔡京は、大いに首都で土木工事を興す。また、新たに道教による皇帝權威の增強を圖る。

2　道教（神霄派）の隆盛と艮嶽の造營

『宋史』四七二、奸臣傳（蔡京傳）には、彼の宰相時代に行われた土木事業がまとめられていて便利である。

京、つねに帝に爲して言えらくは、今泉幣、積むところ五千萬にあまる。和すれば以って樂を廣ぐるに足り、富は以って禮を備うるに足る、と。ここにおいて九鼎を鑄し、明堂を建て、方澤を修し、道觀を立て、大晟樂を作り、定命寶を製す。孟昌齡を任じて都水使者と爲し、大伾三山を鑿ち、天成、聖功二橋を創る。大いに工役を興すこと、無慮四十萬。兩河の民、愁困して生にやすんぜず。[49] 而して京は倜然として自ら以って稷、契、周、召となすなり。又た宮室を廣げ上の寵媚を求めんと欲し、童貫ら輩五人を召し、風するに禁中偪側の狀を以ってす。貫らみな命を聽き、おのおの力の致す所をくらべ、爭うに侈麗高廣を以ってし、相ひ夸尚す。而して延福宮・景龍江の役起こり、浸淫して艮嶽におよべり。

この中から、開封での大土木工事だけを並べると、明堂、延福宮、景龍江、艮嶽となろう。これらは、みな第三次當國期に行われた工事である。これらの工事をめぐる徽宗と蔡京の權威と權力の關係について本節では考察する。

a　明堂と延福宮の建設と蔡京政權

首都空間の變容という觀點から注目されるのが、政和三年（一一一三）の春に工事が開始され、政和四年八月に完成した延福宮である。[50] 延福宮は、元々宮城の內部にあった宴會場の名である。[51] 蔡京は、徽宗を喜ばせるために、宮城が狹いこ

とを與黨に吹聽させ、從來の宮城の北側から內城壁の空間にあったいくつかの官廳や佛教寺院二箇所、軍營を立ち退かせて、十數の殿閣が立ち並ぶ園林をつくり、延福宮と稱した。童貫や楊戩など宦官五人が、それぞれ一區畫を擔當して意匠を競ったため延福五位ともいわれた。延福宮に接する內城壁內側には土が盛られ、杏が植え込まれ、「杏岡」と呼ばれた。[52] やがて宮は內城壁を超えて擴張され、その部分は「延福第六位」と俗稱された。その中を貫く城壕は、三丈（約一〇メートル）[53]の深さに掘り下げられ、石を積み上げて護岸され、舟艇がそこを通っても、景龍門橋の上を通行している人は分からなかったという。

この溝渠が景龍江である。後述する艮嶽工事の際には、引き込まれて山間をながれる溪流となり景觀作りに一役買う。東は封丘門まで延伸された。西では、南北に分流して、蔡京達の邸宅にも接續され、徽宗達の遊興のための通道となった。景龍江の北側には、遠方から集められた珍しい動物が數千頭飼われ、村落や田舍風の居酒屋などが配された。[54]

つづいて明堂が完成する。[55] 先述したように、崇寧四年（一一〇五）八月に、姚舜仁の明堂圖を蔡京が進呈し、建立の詔が出されている。しかし、彗星の出現によって蔡京が失脚したりしたため中斷された。政和五年（一一一五）七月に再び詔が發せられ、內藏庫や左藏庫などの諸庫と祕書省を宮城外に移し、その地に建てられることになった。蔡京は「明堂使」、蔡攸が「討論指畫制度」となり、蔡翛や蔡絛らも加わって、明堂のプランが練られた。構造は夏殷周三代の制や則天武后が作ったものが參照された。詔書には「古とみな合い、その制大いに備わる」と述べられている。祕書省は宣德門の東に移されので、「古の東觀に類す」と稱された。政和七年（一一一七）三月、明堂は完成し、四月、徽宗が親祀した。六月、明堂計畫に參畫した蔡京たちはそれぞれ官を進められた。同月、明堂で「聽朝」・「頒常」・「視朔」が行われることになり、十月には、蔡京等の上奏によって、明堂で臨朝聽政することになった。重要な政治の舞臺が明堂に移動したのである。

明堂の工事が再開された政和五年（一一一五）八月のある夜、大流星が都の空を横切った。記錄に依れば、柳（海蛇座）

から濁（牡牛座）に至り消滅した、地面を照すほどの明るさの、オレンジ色の火球だった。占者は、「天子宗廟有喜國家建造宮室之象」と解釋し、蔡京は百官を率いて瑞兆として皇帝に賀詞を奉っている。[56] 造營事業を積極的に推進しようという蔡京の意圖がここには見受けられる。流星は様々な解釋が可能な天文現象である。[57] 蔡京は天文を重視する徽宗の先回りをして、占星者を動かしたのかもしれない。

翌政和六年（一一一六）七月、「群臣、姦を挾み上を罔するを戒む。豐亨豫大の極盛の時に當たり、五季變亂裁損の計を爲すなかれ。」という詔が出され、朝堂に榜を揭げると同時に、石に刻み尚書省に置かれた。[58] 今は豐亨豫大の時代であるから、五代の亂世の時のように節約・儉約を說いて、皇帝を誤らせてはいけない、という。

「豐亨豫大」は、易の卦を組み合わせた言葉である。「豐は亨り、豫は大なり」とでも訓ずることが可能であろうか。經濟が繁榮し、百姓が樂しみを極めるということであろう。蔡京は當代を「豐亨豫大」の時代であると主張していた。『九朝備要』二六、崇寧元年七月の「以蔡京爲右僕射」の項には、「時に四方承平、帑庾盈溢す。（蔡）京、倡えて豐亨豫大の說を爲し、官爵財物を視ること糞土の如し。累朝の儲うる所、大抵掃地す。」とある。

この時代認識は、徽宗の權威を高めるために吹聽したものとも考えられるが、好景氣だったことを示す史料もなくはない。とにかくも、京師で土木事業を興し、繁榮の時代を徽宗に見せるのが、蔡京の政權維持のための戰略であった。[59]

天譴論を武器とする蔡京の對立勢力が退場し、蔡京は逆に天文現象による「天」の同意を演出した。詔敕に記されることによって「豐亨豫大の說」は、國家の論理となった。恣意的な御筆手詔ではなく、詔敕であることも注目される。すなわち、正式な政策決定過程を經て公認されたのである。

加えて、政和年間には、徽宗は新しい道敎の一敎說によって天譴論を超越する。この變化にも蔡京一族が關係しているようだ。次項はその問題を考察する。

b　神霄派の開封進出と上清寶籙宮

蔡京復權の前年（政和元年）、徽宗は一〇〇日間もの間、病床にあったが、七月に「康復」した（『十朝綱要』一七）。病状が快方に向かったある日、かれは奇妙な夢を見る。蔡絛の『史補』（『紀事本末』一二七、道學、大觀二年五月辛亥の注）によると、

> 政和始め、上疾あること百日を踰え、稍や康復す。一夕夢に人の上方に召すあり。その夢中におもえらく、昔藩邸に在る時のごとく、哲廟の宣召に赴くがごとし。至るに及び、乃ち一宮觀たるのみ。卽ち道士二人ありて儐相爲る。遂に一壇上に至る。上に諭して曰く、「汝、宿命を以って、當に我が教を興すべし」と。上再拜し受命して退く。二儐相は、復た上を導きて去る。寤めるに及び記を作ること良に悉くせり。嘗て遣使し魯公（蔡京）に示す。魯公時になお責せられ杭に居す。始めて大いに宮觀を修す。

とある。この史料の内容は、徽宗が道教への傾倒を深め、その思いを夢物語りに托して杭州にいた蔡京に暗示し協力を求めたと解釋できよう。蔡京は、道觀建設など道教振興政策を實行する能力を期待されて復權したともいえそうである。

蔡京が政權に返り咲いた後、徽宗の權威を象徵するような超常現象が蔡京父子によって報告される。政和三年（一一一三）一一月には、蔡攸が、郊祀に際して天神と地祇が現れたという上奏を行った。蔡京はこの事件を史館に付すように上奏し、徽宗は御筆によって裁可する[60]。『宋史』二二、徽宗本紀、政和三年一一月乙酉の條には、「天神降るを以て、詔して在位を告し、『天眞降臨示現記』を作る。」とある。この時期から道教は、國教的な地位を占めるようになる[61]。政和三年（一一一三）一二月、詔勅によって、道教の仙經を天下に求めている。政和四年正月には、二六等の道階が置かれ、三月には、諸路から、道士一〇人ずつを上京させ、左右街道錄院に登錄し、道士としての講習を行い、習熟した後、地方に歸すということになった[62]。

ちょうどその時期に、徽宗自身が道教神である、と説く林靈素という道士が現れる。[63] 政和五年（一一一五）、林靈素は徽宗に初めて謁見しているようだ。[64] 林靈素が徽宗に會う過程で蔡京との面會を經ていたことを示す史料もある。[65] 特に『佛祖統記』四六、政和七年の條には、「太師蔡京に謁す。以て異人と爲し、上に引見す。」とあり、蔡京が林靈素の異能を評價し徽宗に引き合わせたという。蔡京は自らの權力を維持するために都合のよい說、すなわち徽宗の權威を高めるような教說を述べたので利用したのであろう。阿部肇一氏は、二人の關係について「蔡京と道士との最大の結びつき」と評している。[66]

林靈素の主張は、蔡絛によると、

（林靈素）始めに曰く、神霄玉清王、上帝の長子。南方を主り、長生大帝君と號す。既に世に下降す。乃ちその弟の東方を主る青華帝君を以て、神霄の治を領せしむ。天に九霄有り。而して神霄最高たり。その治を府という。故に青華帝君、また判府天尊と曰う。而して靈素乃ちその府仙（ママ）卿たり。褚慧と曰う。また下降して帝君の治を佐く。また一時の大臣要人を目して、皆な仙府の卿吏とす。魯公を左元仙伯と曰うが若し。鄭居中、劉正夫等、若しくは童貫ら諸巨閹、率ね名位有り。王黼時に內相と爲る。乃ち文華吏と曰う。盛章王革、時に迭いに天府と爲る、乃ち仙獄吏と曰う。伯氏（蔡攸）は時に進奉を主る。乃ち園苑寶華吏と曰う。また上の寵妃劉氏を九華玉眞安妃と曰うなり。天子心に獨りその事を喜ぶ。乃ち通眞先生と賜號す。初め劉・虞・二王先生、皆な上の禮する所と爲る。然るに神怪の事有るも、多く方士自り出づるなり。靈素至るに及び、乃ちその事を以て、これを上に歸して曰く、己はただこれを佐くるのみ、と。つねに自ら、小吏治を佐く、と號す。故に上下その非を攻むる者有るなし。然れども靈素實は術無く、ただ敢て大言するのみ。[67]

とあり、林靈素の說くところでは、徽宗は、上帝の長子で、長生大帝であり、蔡京は左元仙伯で、王黼は文華吏、蔡攸は園苑寶華吏、鄭居中、童貫などもみな天の官吏だったという。天の神霄世界の宮廷がそのまま徽宗＝蔡京政權に天下って

いるという説である。それに對して、蔡絛は疑問に思ったらしいが、徽宗は、「心より獨り其事を喜」んだという。林靈素が重んじられた理由として蔡絛が上げていることは、神霄派の特色として注目される。すなわち、これまで徽宗が崇拜した道士たちは、神怪の事を道士の超能力として説明したが、靈素は徽宗自身の宗教的能力を説き、道士である自分は補佐しているにすぎないとした、という。

林靈素は、皇城の東側に上淸寶籙宮を建ててもらい（政和六年二月完成）[68]、そこを本據とし宗教活動をおこなってゆく。上淸寶籙宮は、延福宮の東門（晨暉門）に、正對する位置にある。この道觀に延福宮から移動する爲に景龍門（舊酸棗門、內城の北壁の門）を通過する複道が設けられた。徽宗はここを通って、林靈素の主催する道教の祭禮にしばしば出席した[69]。官僚や多くの民衆も御利益を得ようと押し寄せた。「宮前」には庶民に藥を施す施設も作られていた[70]。『宋史』四六二、林靈素傳によると、

> 吏民をして宮に詣でて神霄祕錄を受けしむ。朝士の進をよろこぶ者、亦た靡然としてこれに趨く。大齋を設けるごとに、輒く緡錢數萬を費やす。これを千道會と謂う。帝は幄をその側に設く。而して靈素は正坐に升高し、問うもの皆な再拜して以って請す。

とある。

徽宗は、御筆（政和七年：一一一七）を出して、神霄說に對する確信を述べている。

> 朕、澄神し默朝するごとに、上帝親ら宸命を受け（ママ）、訛俗を訂正せしむ。朕は乃ち昊天上帝の元子、太霄帝君爲り。中華、金狄の敎の盛行を被り、焚指・煉臂・捨身して、以て正覺を求むるを睹（み）ゆ。朕甚だこれを憫み、遂に上帝に哀懇して、人主と爲り、天下をして正道に歸せしめんことを願う。帝、請う所をゆるし、弟靑華帝君をして、朕の太霄の府に權たらしむ。朕夙夜驚懼して、なお我が敎の訂するところ未だ周からざるを慮る。卿ら表章して朕を册して敎主道君皇帝となせ。ただ敎門にて章疏するに用うべし。天下に令して混用せしむるべからず[71]。

とあり、道教の世界において、徽宗は教主道君皇帝と名乗ることになった。道教と佛教が對抗關係で論じられるのが、神霄説の特徴である。佛教の隆盛を押さえるために、このような「神話」を徽宗時代獨特の御筆[72]という文書形式で公布する。同年二月、全國各州の天寧萬壽觀は、一齊に、神霄玉清萬壽宮と改名され、長生大帝君と青華帝君の像が置かれた[73]。徽宗が天帝の長子であるという「神話」を全國に押し廣め、皇帝權威を高めることに利用したのである。

佛教に對しての政策については、『十朝綱要』一八、宣和元年（一一一九）正月に、

乙卯、手詔、改天下僧寺爲觀、改佛號爲大覺金仙、餘爲仙人・大士之號、僧號德士。

己未、改女冠爲女道、尼爲女德。

庚申、詔、禁銅鐃鈸佛像等、悉令納官、仍存佛像、添用冠服。

とあり、稱謂の變更や銅製の佛具・佛像の沒收、その他の佛像の冠服着用が命じられている。ただし、まもなく林靈素が失脚し、その後、この命令は一部撤回されている[74]。

さて、林靈素失脚の事情については、諸史料で出入りがある。『紀事本末』一二七、方士では、宣和元年一一月壬申に、溫州に歸されている。『十朝綱要』では、宣和二年八月癸未の條である。『宋史』林靈素傳では、增長した林靈素が、道で皇太子に出會っても、道を讓らないなど、傲慢な行動が目に餘ったためとしている。それに對して、『賓退錄』一に引用されている耿延禧『林靈素傳』では、皇太子との對立の他に、蔡京が雨乞いに失敗した林靈素の無能ぶりを批判する上奏をしたことや、蔡京の同鄉人により、道教を誹る詩が開封で出回ったりしたことが記されている。宣和元年、開封に洪水が押し寄せたため、林靈素に祈らせたが、水が退かなかった。御史臺が、林靈素がみだりに遷都を議したこと、聖聽を惑わしたこと、佛教を改めたこと、大臣を誹謗したことなどを上言したため、林靈素は溫州に歸され、宣和二年に死去したという（以上耿延禧による）。

『佛祖統記』四六、宣和元年正月條の「述」には、「蔡京初め靈素を見て異人となす。引きて之を進む。まさに上に結

知して、以てその寵を固めんとするのみ。靈素、君を得て、ほしいままに佛を罷め道を興す。京始めて物論を懼れ、すみやかにその妄を言うも及ばず。」とある。これによれば、蔡京は初めは林靈素を利用して、權力を維持しようとしたが、林靈素が徽宗の尊崇を一身に受け廢佛を強行したため、「物論」（世論）を恐れ、批判するようになったという。初めは良好だった蔡京と林靈素との關係が、後に惡化したことは事實であろう。この問題の背景については、他に次のようなことも指摘できる。

蔡京の息子たちの中で、長子蔡攸は神霄派の支持者であり推進派である。それに對し末子の蔡絛は前掲した『史補』の傍線部において、林靈素の無能ぶりを指摘している。彼の『訴神文』によると、蔡一族はみな林靈素の說を信じ、「神霄祕籙」をうけたが、蔡絛だけは、受けなかったため、徽宗の怒りを買い、結局、枷をはめられ安州に編管され、蔡京が懇願したため、死を免れたという。[75] これらは南宋まで生き延びた蔡絛の文章なので、額面通り受け取ることはやや躊躇されるが、宣和元年七月丙辰の御筆[76]には、

> 蔡絛、さきに、狂率によりて、廢黜せらること幾年なり。蔡京は元老にして、動は王室にあり。未だ終棄するに忍びず、特に舊官に敍するを與えるの外、宮觀を與え、便にゆだねて居住すべし。

とあり、蔡絛が徽宗の逆鱗に觸れたことは事實のようだ。この時期から推測すると、「狂妄輕率」の內容は神霄派・林靈素に對する反對であったと思われる。長子蔡攸と對立するようになった蔡京は寵兒蔡絛の辯護に回り、林靈素を批判した可能性も考えられる。

林靈素が開封を去った翌年の宣和二年六月、蔡京が願い出ていた致仕が認められて、第三次當國期は終了する。[77] この致仕の背景には、前述のような一族內部の問題があった。[78] 外では兵權を掌握する童貫や、徽宗お氣に入りの王黼が政權の主導權を握りつつあった。[79]

林靈素が失脚し、蔡京も政權から去った。ただし、神霄派が國家的宗教であることは、王黼政權[80]においても變化はない。

たとえば、宣和三年（一一二一）一〇月丙辰に、徽宗は寶籙宮神霄殿にお出ましになり、王黼などに元一六陽神仙祕籙を親授しており[81]、その翌月には、「師事胡法造墓捨身」を禁じる詔敕も出ている[82]。徽宗の道敎（神霄派）への姿勢に變化があった形跡は無さそうである（次項「艮嶽の造營」も參照）。當時、王文卿という道士が、神霄派のリーダーとして開封に來ていた。後の神霄派は、林靈素の惡名をさけて、王文卿を創始者としている[83]。

c　艮嶽の造營

徽宗時代に艮嶽（この名稱は、建設中に使われるようになったものだが、本稿では通稱として初めから用いる。萬歲山、壽嶽などともいった。）という人工の山が作られたことはよく知られている。しかし、造營の目的は、必ずしも明らかではない。百科事典などには、天下の珍獸怪禽や名木が集められたところから「自然動植物園」という說明もみられるが、實際はどうだったのか。『揮麈錄後錄』二には、徽宗が卽位した當初、道士劉混康から、「京城の東北隅の地、堪輿に叶う。もし形勢加えるに少高を以てすれば、當に多男のきざし有るべし」といわれ、そこで「數仞崗阜」を作らせるや、男子が次々と產まれたため、徽宗は、道敎を信じるようになり、艮嶽を造營することになったという說話が載っている。が、本格的な造營はやはり政和年間以降である。

『宋史』八五、地理志、京城によると、「萬歲山艮嶽。政和七年、始於上淸寶籙宮之東作萬歲山。」とあり、上淸寶籙宮の東に造られたという。しかし、『紀事本末』一二八、萬歲山の項、政和五年九月甲辰の注（蔡絛『宮室苑囿篇』）には、「又た、寶籙宮において工部侍郎孟揆に命じて土功を鳩（あつ）めしめ、梁師成に作役を主らしむ。」とある。同書、宣和六年九月庚寅の注（『楊氏編年』）には、「（寶籙）宮後累石爲山」とある。これらにより、寶籙宮の東方に隣接もしくは、寶籙宮内に建設されたことがわかる[84]。すなわち艮嶽は、寶籙宮の一部だったのである。おそらくは、寶籙宮の一部として作られ始めたが、占有する領域が廣まり、獨立した施設と見なされるようになったのであろう。艮嶽の領域は、周圍一〇餘里に

及んだという（『宋史』八五、地理志、京城。內城は周圍二二里である）。

『紀事本末』一二八、萬歲山の項の冒頭を見ると、政和五年（一一一五）九月頃、工事が行われていたようである。おそらく、寶籙宮の工事とほぼ同時に行われていたのであろう。艮嶽の完成が公式に發表されたのは、宣和四年（一一二二）であるが[85]、この間に、山に「神霄」が降り、その時の詩の一節「艮嶽排空霄」からはじめて艮嶽と命名されている[86]。艮嶽に神が降臨する演出がたびたび有ったことは、汪藻の「賀神降萬歲山表」という文章の題名からも知られる[87]。この艮嶽も、徽宗の神霄派道教信仰の關連施設だったのである[88]。

宗教學の成果を參照すると、山は天上の神が降臨する場所として世界各地の民族によって意識されている。シュメール人の都市國家に見られるジグラッドや、インドのパゴダなどは人工の山と位置づけられるという。中國人も同樣であり、郊祀の時に用いられる圓壇は、神を迎える施設なのである[89]。

宣和四年（一一二二）に御製の『記』（『揮麈錄後錄』二引）が發表されている。それには、

…高上の金闕は、則ち玉京の山なり。神霄大帝も、亦た下遊し廣愛す。しかして海上に蓬萊三島あり。則ち帝王の都する所、仙聖の宅する所、形勝に非ざれば居せざるなり。傳に曰く、山を爲ること九仞、功一簣を虧く、と。これ山爲るべし、功書かざるべきか。

とある。要するに、艮嶽は、單なる園林の假山ではなく、天神が住まう天上世界を地上に再現した「世界」であった。それ故に神霄が降ったことで艮嶽と改名された。天神である徽宗はこの「世界」の主人公である。かれが艮嶽を訪れる際には、雲が起こり[90]、鳥が一齊に飛び立って出迎えた[91]という。このような演出が行われたのである。

ところで、艮嶽は華北の人々にとっての神仙世界であり、江南の山水をモデルとしたものであった。以下に數例をあげておこう。

先に引いた蔡絛の「宮室苑囿篇」の下文には、

…土山を築くに、以って餘杭の鳳皇(ママ)山を象る。諸苑に雄たり。その最高の一峯九十尺、山周十餘里。西介亭より、岩嶢重複し、東西二嶺に分つ。直に南山に行きて開門す。巖穴に飛棧あり。溪澗に悉く備な一洞口有り。纔かに兩夫を納れるべし。而してその中は數百人を容れるに足る。檻泉に至れば、泛流皆な晝夜絕えず。山中は平地を包み、環するに嘉木清流を以てす。諸館舍臺閣を列するに、多く美材を以って、楹棟と爲す。而して五采を施さず、自然の勝あり。山の上下、亭宇を立てること、數うるに勝うべからず。石の大なる者あり。高さ四十尺、神運昭功石と名づく。江南陳後主三品石、姑蘇白樂天手植檜とその他の名石望木の若きも率ねその中に入る。

とある。艮嶽は杭州の鳳凰山の形を借りて作られたという。景龍江が導かれ溪流を形成し、泉水が四時わき出ていた。(92) 殿閣はけばけばしい色彩を廢し、自然の色を生かしたものだった。このようなデザインは「江浙に倣った」(93)ものだったという。

景龍江の「江」とは南方で河川を呼ぶときに使われる語であり、華北の河川には一般には用いられない。開封を貫流する運河もすべて「河」が加えられている。景龍江は殊更にこのような名稱が與えられたのである。さらに花石綱で、江南陳後主の三品石、姑蘇の白樂天手植の檜など江南の名石望木が次々と運び込まれる。黄砂舞う開封に江南の風景が現出されたのである。

次に艮嶽の四至を問題としたい。艮嶽が延福宮と上清寶籙宮の間の東華門街以東に造營されていたことは確實である。上清寶籙宮の「後」すなわち北に作られたことも前掲史料から明らかである。東華門街と平行して通る街路が馬行街である。馬行街とは、開封一の繁華街として『東京夢華錄』三に紹介されている。南に上清寶籙宮、西に宮城（延福宮）、北に內城壁に圍まれている空閒で、周圍五キロに及ぶ艮嶽を容れるには、東側の馬行街をつぶして、內城東壁に達したと考えることもできる。張勁氏の論考はこの說を採っている。(94) 張氏は、『東京夢華錄』に、艮嶽のことが全く觸れられていないことにもふれ、『夢華錄』の作者は、艮嶽ができる以前の開封を記述した可能性が高いという。

しかしながら、馬行街については蔡絛の『鐵圍山叢談』にもその繁華が記され[95]、艮嶽造營に關わって廢されたことは觸れられていない。先に引いた『林靈素傳』（『賓退錄』一引）では、宣和元年頃、馬行街で處刑が行われたことが記錄されている。決定的なのは、金代に開封を訪れた樓鑰が馬行街を通過しているのである[96]。張氏説には從えない。

とすると、內城の北壁を越えて展開したと考えるしかなくなる。この假説を支持する狀況證據はいくつか存在する。延福宮はすでに內城北壁を越えて展開していること。艮嶽は、內城外の景龍江を內部に取り込んで景觀作りに利用していること。金代の開封を訪れた范成大によると、艮嶽の殘石が舊封丘門の外側の河中に放置されていたという[97]。周寶珠氏は、第二の理由からこの説を採っている[98]。

內城の北壁は、延福宮と艮嶽の造營によって、破壞され、もしくは假山として利用された。考古發掘によると、他の城壁に比べ、北壁は破壞の程度がひどいというが[99]、このためであろう。金が城郭を再建する際、北壁はすでに破壞されてしまっていたため、やや北に新たに版築することになったのであろう。

以上のように、政和二年以降、豐亨豫大の説や神霄派道教によって徽宗の權威を高める事に成功した蔡京は、八年間に渡って宰相の座に座り續ける。政和宣和年間、開封には、神霄派の發展に對應して、大規模な土木建築が矢繼ぎ早に行われていった。特に艮嶽は、神霄世界から神が降臨する場所として建設され、江南の風景が華北に再現された。これらの皇帝の權威や聖性を演出する首都機能をもつ道教施設が建設されたことが、徽宗時代の開封の大きな特徴なのである。

3　首都空間の再編と居住者

權威を強化するための道教施設の造營は、新たな聖の首都機能の創設である。徽宗朝では、それがセットで作られたことに特徴がある。建造物は相互に複道や景龍江によって連絡されていた。あたかも交響樂のように作用したのである。點ではなく面的に首都機能が與えられたことは、開封の首都空間を再編成する結果となった。しかもそれが建設された期間

は、政和年間から宣和年間の數年間だった。本節では、この問題を論じると同時に、急速に進む再編のなかの庶民生活についても若干の考察を加えてみよう。

a　景龍門と東華門街（北へ向かう首都の中心軸）

政和四年（一一一四）八月、延福宮が完成し、政和六年（一一一六）二月、上清寶籙宮が落成する。兩者の中間に位置していたのが、景龍門である。この門は、宮城の東側の街路（東華門街）が、內城を貫くところに位置しているが、政和年間以降、特別な役割を持った。まず、先述したように、延福宮から上清寶籙宮や艮嶽にいたる特別の通路（複道）が作られ、徽宗は神霄派の祭禮に參加するためしばしば往復した。また、艮嶽に御幸して「天上」の景觀を樂しんだ。すなわち、景龍門は俗世界から聖世界に至る架け橋だったといえよう。この門の機能はこれだけに止まらない。

景龍門には、政和五年（一一一五）[100]から、皇城の正門（宣德門）のように上元觀燈の飾り附けが施された。しかも、正門よりも一ヶ月近く早くからである。あわせて、冬至が過ぎると、景龍門から東華門の間の街路では、終夜にわたって夜間外出禁止令がゆるめられた。景龍門下には露臺が置かれ、上清寶籙宮まで伸び、延福宮の東門（晨暉門）の外側には、皇帝がお出ましになる「看位」が置かれた。周圍には夜市で賣られる樣々な點心が所狹しと並べられ、お召しに備えていた。もちろん一般向けの露店も所狹しと出店し、人々は「群飮」した。上元觀燈に先だっての放夜（夜間外出禁止の解除）だったので、「先賞」[101]あるいは「預賞」[102]とよばれた。やがてその範圍は、景龍門の外側に延長され、舊封丘門にまで至ったのである。[103]

『宋史』一一三、禮志、嘉禮四、游觀には、

（政和）五年十二月二十九日、詔すらくは、景龍門に預め元夕の具[104]を爲せ。實に民風を觀、時態を察し、太平を黼飾し、樂國を增光せんと欲するなり。徒に遊豫を以て事と爲すに非ず。特に公、師、宰執以下に宴を賜い、御製詩四韻

を太師蔡京に賜うに及ぶ。

とある。民情を観察することによって、平和な世の中を「黼飾」（演出）し、繁榮する國家をさらに輝かしいものにする目的の觀燈行事であると、この詔は主張する。

數年後、景龍門上の上元の宴に參加を許された王安中は、つぎのように述べている。

…旨ありて景龍樓に登るを許さる。穆清廡外の閣道由り以て升る。東のかた艮嶽を望む。松竹蒼然たり。南のかた琳宮を視る。雲煙絢爛たり。その北は則ち清江の長橋なり。あたかも物外の若し。都人百萬、樓下に遨樂し、歡聲四起す。もっとも以て太平豐盛の象を見るに足る。群臣頌嘆することこれ久しうす。(105)

「東には、艮嶽がそびえ立ち、松竹が鬱蒼としている。南には琳宮（上清寶籙宮）があり、雲がたなびいている。北には「清江長橋」(106)がある。まるで俗世間から超越しているかのようだ。景龍樓の下には、都民が澤山遊んでいて、歡聲が所々で上がっている、太平繁昌の有様を十分觀望できる」と景龍門樓からの風景を贊嘆している。

宮城の東側を通って北に向かう街路（東華門街）は景龍門から外城域にいたる。延福宮と道觀・艮嶽が作られ、この街路がそれに挟まれる形となり、景龍門は、宮城と、神霄世界の架け橋となる一方で、門の上下では、上元觀燈の行事が、盛大に長期間に渡って行われるようになった。さらに景龍門から北に進み景龍江を渡ると、徽宗の皇子たちの豪邸が建ち並び（政和年間に建設された。(107)）、また火災によって全燒した瑤華宮の地に、大きな池が穿たれ、曲江と名附けられた。(108)

宣和年間、皇城の東南角の十字街から景龍門までの街路に、「夾城牙道」、すなわち兩側に壁が築かれた官道が作られたが（『東京夢華錄』二）、これはおそらく道路中央に設けられた皇帝用の通路であり、御街と同様の構造になったことは興味深い。東華門街から景龍門を抜けて新酸棗門に至る北に向かう街路は、南に向かう御街に對して、開封の第二の中心軸となったのである。徽宗政權は、第二の中心軸を用いて、道教の權威の視覺化と同時に「太平豐盛」を演出しようとした。これらは「はじめに」で述べた聖の首都機能といえよう。

時に、北方で、金が興起し、遼との戦闘が開始されていた。北宋は、燕雲を取り戻すために、複雑な外交を始めていた。この問題と北へ向かう軸が強調されたことは關連が有るのかもしれない。殊更に道教によって宗教的な權威が演出されたことは興味深い。道教は、外來宗教の佛教などに對して民族的宗教の色彩が強い。唐の後半に、領土が漢民族地域に縮小した段階で、道教や儒教が盛んになり、廢佛が行われた[109]ことと類似するように思える。

b　庶民生活と賜第

政權による「太平豐盛」の演出は、文字通り庶民生活を豐かにしたのだろうか。兪兆鵬氏は、この時期の諸政策が惡性のインフレーションを招いたと論じる[110]。

①財政支出が、土木工事、道教儀禮、宮廷等の消費の擴大によって擴大し（まさしく、本稿でいう「演出」のためである）、そのため當五・十等の大錢や紙幣（交子）・度牒などの增發がおこなわたこと。

②政府の消費が高まったため、物資や通貨の流通速度がこれまでになく高まったこと。

この二點がインフレの理由として上げられている。ものとかねが動き回るため好景氣を呈しただろう。しかし、物價が上昇したとすると給與所得者は生活が苦しくなる。この時代、官界の人々の中で、本業を疎かにして商業に手を染めることが流行したのはこのためであろう。首都の治安維持を底邊で擔っていたのが禁軍から派遣された巡舖兵であった。開封城內に四〇〇箇所ほどあった巡舖に五名の兵士が配備されていた。その兵士が、商業に從事している場合が多く、治安維持の業務に支障が起こっていたという[111]。開封城內の問題とは少し異なるが、似たような例として、驛傳の舖兵が、本來運ぶべき制敕などを滯らせて、民間から委託された商品の輸送を行い小錢を稼いでいることが報告されている[112]。上層部も同じ事で、何執中は開封城內に多くの賃貸物件（「邸店」）を持っており巨利を稼いでいた[113]。

このような中で、花石綱や增稅によって地方の庶民は疲弊していった。やがて方臘の亂などが發生する。開封城內も見

かけ上は繁榮していたが、賜第によって苦しむ最下層の人々がいた。空閒の再編という意味で、最後にこの問題をとりあげたい。

宋代の文武官にとって最大の恩典は、開封城内に邸宅を賜ることであった。これは「賜第」と呼ばれる。梅原郁氏は、すでにこの問題について「賜第の功臣は皇帝と個人的關係が深く、かつ誰もが認める國家的な事業の責任者という功勞が必要で、その點からいえば皇帝個人の特別に意味深い恩賞だった」と述べている。[114] それゆえに、寵臣が輩出した徽宗時代は、賜第が從來とは違う様相を呈していた。梅原氏は、徽宗朝時代に賜第されたものとして、王黼・鄧洵武・高俅の三名を擧げているが、實際にはもっと多くのものが賜第を受けていた。『三朝北盟會編』三六に引用されている『靖康錄』には、「これより先、宣和中、內侍賜第されるもの有ること多し。」とある。王厚・童貫が、賜第を受けたのは、崇寧三年九月である。[115]

特に、蔡京は、二度にわたって賜第され、東園・西園と言われた。まず、崇寧末年、[116] 西の閶闔門（舊梁門）の外に賜った。二度目は政和二年（一一一二）[117] である。こちらが東園であろう。[118]

王黼も、蔡京と同じく二カ所である。政和六年（一一一六）一一月には、「昭德坊」に第を賜っている。[119] 昭德坊は、相國寺の東に位置する。後に閶闔門（舊梁門）外の竹竿巷に第を賜った。こちらの邸宅は周圍數里の王宮のような廣さであり、青銅で葺かれた屋根が特徴的な正殿と、民閒の花街のような風情の地區があると思うと、花石を集めた後苑には假山があり、その閒には竹籬茅舍が散見され、村落のような景觀を呈していた。そのため、この部分は西村と呼ばれていた。[120]

閶闔門以西の地に、西園・西村があったが、おそらくこの附近は、低濕でない一等地だったと思われる。開封市街は、東南部が低濕で居住條件が餘り良くない。以前、拙稿で論じたように、宋初、軍營は城内西側に多く建てられている。[121] 神宗時代以降、廢營地が多くなった關係で、賜第を受け入れる餘地ができていたのであろう。

蔡京の西園の様子については、『朱子語類』一四〇に「蔡京父子、在京城之西兩坊、對賜甲第四區、極天下土木之工。

一曰太師第、乃京之自居也。二曰樞密第、乃攸之居也。三曰駙馬第、乃倏之居也。四曰殿監第、乃攸之居也。」とあり、その巨大な構えが知られる。『東京夢華錄』によれば、汴河を跨ぐ橋の一つに蔡太師橋という橋がある。この橋は、ちょうど内城外の西側に位置しており、西園は、梁門街から汴河まで、南北に伸びていたと推定される。蔡絛[122]に依ると、工事中には、唐人の古墓が次々と發見されたという。その墓誌銘には、それぞれ、「城西二里に葬った」と書いてあったらしい。すなわち、内城壁から、二里（約一㎞）の所に蔡京の西園があったのである。

このように、下賜された官地だけでは足らず周圍の庶民の家屋を撤去して造營を行うのが普通だった。追い出された庶民は代價は支給されず泣くしかなかった[123]。このような社會問題が開封で發生したことが、徽宗時代の特徴である[124]。とくに土木建築が盛んだった政和宣和時代に告發する史料は懸けられている。御史中丞翁彦國は宣和二年（一一二〇）一〇月に、つぎのような、上奏を行っている。

…臣聞くならく、賜を蒙るの家、則ち必ず宛轉せんとし、官屋を踏逐するに空閑を以って名と爲し、或いは酬價を請いて百姓の物業を兌買し、實に皆名居を起遣す。大なる者は坊巷に亘り、小なる者も數十家を拆するを下らず。一時に驅迫し、老を扶け幼を携えしもの、暴露し怨咨す。殊に盛世の宣しく有るべき所にあらず[125]。

坊巷にわたるような邸宅は、將に蔡京の西園である。蔡京はこの年の六月に致仕となり、廟堂から去っている。だからこそ、このような上奏が可能になったと思われる。

おわりに

徽宗時代は、開封の都市空間が大いに再編成された時代であった。その空間再編成は、徽宗皇帝の權威を擴大し自らの權力基盤を強化しようとする蔡京とその一派の政治活動の賜物だった。とくに、舊城東北部の變貌が注目される。宮城の北に延福宮が建設され、そこから、東華門街を挟んだ東側に、上清寶籙宮と艮嶽が建設された。兩者は、景龍門の門樓に

設けられた複道によって結びつけられ、徽宗は俗界と聖界を行き来することが容易にできるように工夫されていた。彼は、天子であると同時に、教祖道君皇帝（あるいは長生帝君）であることによって権威附けられたのである。

徽宗をふくめた支配者集團と首都の庶民達は、上清寶籙宮で行われる道教の祭典や、「預賞」とよばれた新しい上元觀燈の行事に、ともに參加することによって、「太平豐盛」を意識し、徽宗と北宋政權の權威を納得する仕組みだったのである。首都の庶民だけではない。各州に神霄玉清萬壽宮が設けられ、長生大帝君（徽宗）とその弟青華帝君の像が奉安された。神霄派道教は國教となり佛教が彈壓された。組織の中心は、上清寶籙宮だった。

以上のように、徽宗時代後期の開封には、神霄派道教をイデオロギーとする支配原理に基づき、聖の首都機能が整備されていったといえる。初めに述べたように北宋前期の開封では、軍事力の中心としての首都機能が、空閒や景觀を支配していた。すなわち俗の首都機能が卓越した首都であった。しかし、その中心であった禁軍軍營が、王安石の軍政改革のなかで半減してしまった。徽宗時代になると、超自然的な聖の首都機能が整備され、空閒や景觀を再編成するような役割を擔うようになった。

蔡京も首都の防衛に關して意識していた形跡がある。それは第一次當國期に設置が決定された四輔である。開封周邊の四つの州を要塞化し、それぞれに二萬ずつの軍事力を配備して首都を側面から防衛しようという計畫である。しかしながら、蔡京が失脚すると、計畫は放棄され、第三次當國期には、首都改造に熱中したためか、四輔計畫は顧みられなかった(126)。また、インフレによる官界の商業化によって、治安は惡化し、寵臣の無法は放置され、中央と地方の情報傳達は滯るようになった。それが、政和・宣和年閒の狀況だった。

『東京夢華錄』でもっとも獨創的で、精彩を放っている記述は、事細かに小料理の名稱が書かれ、時刻によって移り變わる露店の模樣などが描寫された部分だと思う。讀者は庶民の消費生活の豐かさに惹き付けられる。紹興年閒に執筆した著者の目的は、忘れられかけている開封の「當年之盛」を「追念」し、後世に殘すことにあった（『東京夢華錄』自序）。し

かし「艮嶽」や「景龍江」の記事は全くない。豪壯を誇った王黼や蔡京の賜第の位置や、その様子についても、直接的には記述がない。宣德門や景龍門の觀燈については詳細に記されるが、神霄派道教の總本山で行われた千道會については無關心であるかのようだ。おそらく南宋時代に於いては、失政の象徴であり「追念」するような良い思い出ではないのである。徽宗時代の開封を知るために好個の書が『東京夢華錄』である。本稿でも大いに利用した。しかしながら、一側面の記錄である點も忘れてはならない。

註

（1）梅原郁「皇帝・祭祀・國都」（中村賢二郎編『歷史のなかの都市』ミネルヴァ書房、一九八六）。

（2）拙稿「五代宋初の洛陽と國都問題」（『東方學』第九六輯、一九九八）。

（3）拙稿「宋都開封の人口數についての一試論」（『東洋學報』第八二卷第二號、二〇〇〇）。

（4）拙稿「宋都開封と禁軍軍營の變遷」（『東洋學報』第七四卷第三・四號、一九九三）。

（5）本稿における『清明上河圖』は、張擇端眞筆といわれる北京故宮博物院所藏圖（『石渠寶笈三編』所收版）をさす。

（6）『續資治通鑑長編拾補』一七、建中靖國元年二月丁巳の條に引用されている『宋編年通鑑』引の章惇に對する任伯雨の彈劾文によると、章惇は「端王浪子爾」と發言したという。なお『佛祖歷代通載』一九にも同樣の發言が記錄されている。

（7）徽宗が皇帝に選ばれた模樣については、『續資治通鑑長編』五二〇、元符三年正月己卯の各條に詳しい。なお、『宋史』徽宗本紀ならび、『九朝備要』二五、元符三年正月も參照。

（8）『紀事本末』一三一、蔡京事跡、政和二年二月戊子引用の詔中にある言葉である。

（9）梅原郁「宋代の救濟制度」（中村賢二郎編『都市の社會史』ミネルヴァ書房、一九八三）。

（10）『清波雜志』一二、惠民局による。本來は、民に恩惠を與えるはずだが、年ごとに四〇萬も黑字が出て、戶部の經費を助けていたという。

（11）『九朝備要』二七、崇寧三年、二月、置漏澤園の項に「中書省言、元豐中、詔以官地、葬枯骨。今欲推廣先志故也。」とあり、『宋史』一七八、食貨志、振恤には「宣和二年詔、居養・安濟・漏澤、可參考元豐舊法、裁立中制。」とある。三門峽市文物工作隊『北宋陝州漏澤園』（文物出版社、一九九九）によると、陝州の漏澤園で一番古い墓は

崇寧四年の銘がある。

（12）『九朝備要』二七、崇寧三年正月、鑄九鼎の項。

（13）『十朝綱要』一六、崇寧四年八月甲申。

（14）『九朝備要』二七、崇寧三年三月、築圜土の項。

（15）『九朝備要』二六、崇寧元年十月、置外學賜名辟雍の項。同書二七、崇寧三年六月、以王安石配饗孔子の項。

（16）則天武后の明堂については、渡邊信一郎『天空の玉座』（柏書房、一九九六）、金子修一『古代中國と皇帝祭祀』（汲古書店、二〇〇一）を參照。

（17）『紀事本末』一二五、明堂。

（18）『九朝備要』二七、崇寧四年三月、竇會孝序の項には「又論明堂辟雍等事、孝序曰、相公命講筵不得進讀漢史。蓋欲擧明主於三代之隆、今乃循王莽已行之跡、而欲蹈商周虛名、可乎。」とある。

（19）小島毅「宋代の國家祭祀――『政和五禮新儀』の特徴」（池田温編『中國禮法と日本律令制』東方書店、一九九二）。

（20）林大介「蔡京とその政治集團」（『史朋』三五號、二〇〇三）の分析による。本論文は、徽宗時代の政治過程について詳細な分析を行っており、參考になった。ただし、天譴論により徽宗に影響をあたえた郭天信について觸れず、さらに徽宗の道教崇拜と蔡京の權力との關係も論じられておらず、疑問に思った。

（21）『九朝備要』二六、崇寧元年七月、以蔡京爲右僕射の項。

（22）小島毅「宋代天譴論の政治理念」（『東洋文化研究所紀要』一〇七册、一九八八）。

（23）『續資治通鑑長編』二六九、熙寧八年十月戊戌には「王安石言、臣等伏觀、晉武帝五年、彗實出軫、十年、軫又出孛、而其在位二十八年、與乙巳占所期不合。蓋天道遠、先王雖有官占、而所信者人事而已。天文之變無窮、人事之變無已、上下傅會、或遠或近、豈無偶合、此其所以不足信也。…」とあり、王安石は天變を信じないことを明言している。

（24）『紀事本末』五九、王安石事跡上、熙寧三年三月己未には、「上諭王安石曰「聞有三不足之說否。」王安石曰「不聞。」上曰「陳薦言『外人云、今朝廷爲天變不足懼、人言不足卹、祖宗之法不足守。昨學士院進試館職策、專指此三事。』此是何理。朝廷亦何嘗有此、已別作策問矣。」安石曰「陛下躬親庶政、無流連之樂荒亡之行、每事惟恐傷民、此卽是懼天變。陛下詢納人言、無小大惟言之從、豈不卹人言。然人言固有不足卹者、苟當於義理、則人言何足恤。…」とある。下線部の論理は、蔡京の論理と全く同じである。

（25）『宋史』二〇、徽宗本紀、崇寧四年十月壬辰。

（26）『九朝備要』二七、崇寧五年正月、彗出西方の項。

（27）小島毅氏前揭「宋代天譴論の政治理念」一二頁を參照。

（28）『九朝備要』二七、崇寧五年一二月、劉逵罷の項。

（29）『九朝備要』二七、崇寧五年二月、蔡京罷以趙挺之爲右僕射の項。

（30）『九朝備要』二七、崇寧五年正月から二月の諸項を參照。

（31）『九朝備要』二七、崇寧五年一二月、劉逵罷・崇寧五年二月、蔡京罷以趙挺之爲右僕射・大觀元年正月、以蔡京爲

左僕射の諸項を參照。

(32)『九朝備要』二七、大觀元年三月、趙挺之罷の項。

(33) 張商英は、新法派であったが、蔡京の反對者だったため、黨籍に入れられてしまった。熱心な佛教信者であったことも、蔡京と對照的である。阿部肇一「北宋末の法黨と佛教・道教」(『渡邊三男博士古稀記念日中語文交涉史論叢』櫻楓社一九七九、所收)を參照。

(34) 張商英と郭天信の關係については、『九朝備要』二八、政和元年十月、竄張商英。『宋史』四六二、郭天信傳などを參照。

(35) 以下の郭天信の經歷は、『宋史』四六二、郭天信傳參照。

(36)『九朝備要』二七、大觀三年六月、蔡京罷の項。『十朝綱要』一七、大觀三年六月丁丑。

(37)『九朝備要』二七、大觀三年十月、蔡京致仕仍朝朔望の項。

(38)『宋史』二〇、徽宗本紀、大觀四年五月丁未。『十朝綱要』一七では、乙卯に懸けられている。

(39)『紀事本末』一三一、蔡京事迹、大觀四年五月甲子には、「詔、蔡京權重位高、人屢告變。全不引避。公議不容、言章屢上、難以屈法、特降授太子少保、依舊致仕。在外任便居住。」とあり、星變と澤山の反對意見などにもとづく總合的な判斷で、蔡京は開封から追われることになったようである。『十朝綱要』一七、大觀四年五月甲子に、太子太保に降格とあるが、誤りであろう。

(40)『紀事本末』一三一、張商英事迹、大觀四年六月乙亥。

(41)『宋史』三五一、張商英傳。『紀事本末』一三一、張商英事迹、大觀四年六月乙亥の條注。

(42)『宋史』三五一、張商英傳。

(43)『九朝備要』二八、政和元年四月、張商英罷の項。

(44)『九朝備要』二八、政和元年十月、竄張商英の項。

(45)『十朝綱要』一七、政和元年十月辛亥。『九朝備要』二八、政和元年十月、竄張商英によると、張商英は、宣和三年に、京南で死去している。

(46)『十朝綱要』一七、政和二年二月戊子。『紀事本末』一三一、蔡京事迹、政和二年二月戊子。

(47)『紀事本末』一三二、蔡京事跡、政和二年三月乙亥。『十朝綱要』一七、政和二年三月壬午によると、この日に入見している。

(48)『紀事本末』一三一、蔡京事跡、政和二年五月己巳。

(49) この工事については『九朝備要』二八、政和五年六月、天成聖功二橋成の項を參照。

(50)『宋史』八五、地理志、京城。『九朝備要』二八、政和四年八月、延福宮成。

(51)『九朝備要』二八、政和四年八月、延福宮成による。元々延福宮が有った場所には、保和殿が新築された(『九朝備要』二八、政和三年九月、保和殿成)。こちらにも江南風の園林が附屬していた。

(52)『楓窗小牘』上。

(53)『九朝備要』二八、政和六年二月、上淸寶籙宮成の項による。『宋史』地理志によると、三尺である。ここでは前

者を採る。

(54)『九朝備要』二八、政和六年二月、上清寶籙宮成。

(55) 明堂については、『紀事本末』一二五、明堂と『九朝備要』二八、政和五年八月、建明堂の項。

(56)『九朝備要』二八、政和五年八月、流星出柳。

(57)『宋史』五二、天文志、流星。

(58)『九朝備要』二八、政和六年七月、詔豐豫盛時毋爲裁損計の項。

(59)『宋史』一七九、食貨志、會計には「京又專用豐亨豫大之說、諛悅帝意。始廣茶利、歲以一百萬緡進御、以京城所主之。其後又有應奉司、御前生活所、營繕所、蘇杭造作局、御前人船所、其名雜出、大率爭以奇侈爲功。歲運花石綱、一石之費、民閒至用三十萬緡。姦吏旁緣、牟取無藝、民不勝弊。用度日繁、左藏庫異時月費緡錢三十六萬、至是衍爲一百二十萬。」とある。

(60)『十朝綱要』一七、政和三年一一月癸未の條。また「天神下視太師蔡京乞宣付史館御筆手詔」(『宋大詔令集』一三六)。この詔によると、この時點では、徽宗はまだ神格化されていない。

(61) 宮川尚志「宋の徽宗と道教」(『東海大學紀要・文學部』二三、一九七五)。

(62)『紀事本末』一二七、道學の各條を參照。

(63) 林靈素については、唐代劍「『宋史・林靈素傳』補正」(『世界宗教研究』一九九二年第三期)、同「論林靈素創立神霄派」(同一九九六年第二期)宮川尚志「林靈素と宋の徽宗」(『東海大學紀要・文學部』二四、一九七六)、松本浩一「徽宗の宗教政策について」(『中華世界の歴史的展開』汲古書院、二〇〇二、所收)などがある。

(64) 林靈素が徽宗に始めて拜謁した年代については、政和三年・政和五年・政和六年・政和七年の諸說があるが、唐代劍氏の意見に從う。

(65)『紀事本末』一二七、方士、宣和元年一一月壬申の條に引く『楊氏編年』など。

(66) 阿部氏前揭「北宋末の法黨と佛教・道教」。

(67) 蔡絛『史補』(『紀事本末』一二七、道學、政和六年十月甲申の注。)

(68)『九朝備要』二八、政和六年二月、上清寶籙宮成の項。『紀事本末』一二七、方士、政和三年十月戊申には、程若虛が寶籙先生に封じられた記事の後の案語に「寶籙宮、不見起建月日、或自此始。」とあり、この時點から建設が始まった可能性を指摘するが、諸書は、林靈素の說に喜んだ徽宗が、彼のために建てたとする(『紀事本末』一二七、方士、宣和元年一一月壬申の條に引く『楊氏編年』など)。

(69)『宋史』八五、地理志、京城には「開景龍門、城上作複道、通寶籙宮、以便齋醮之路、徽宗數從複道上往來。」とある。『宋史』二一、徽宗本紀、政和七年二月乙亥なども參照。

(70)『九朝備要』二八、政和六年二月、上清寶籙宮成の項によると、「仁濟・輔政」の二亭があって民衆に藥を施した。

(71)『紀事本末』一二七、道學、政和七年四月庚申。

（72）御筆については、徳永洋介「宋代の御筆手詔」（『東洋史研究』五七巻三號、一九九八）を參照。

（73）「改建神霄玉清萬壽之宮御筆」（政和七年二月一三日、『宋大詔令集』一七九）を參照。

（74）『十朝綱要』一八、宣和二年六月丁亥には「詔、天下寺院、昨以奸人妄有申請改革作德士宮觀。可除大相國宮外、仍舊爲寺院。」とあり、また、八月乙未の條には、「御筆、復德士・女德爲僧尼」とある。林靈素が去ったことにより、佛教に關する彈壓は中止されたようだ。しかし同書同卷宣和三年一一月戊寅の詔では、再び佛教儀禮を禁止する。

（75）『紀事本末』一三一、蔡京事迹、重和元年十月戊申の條注。

（76）『紀事本末』一三一、蔡京事迹、宣和元年七月丙辰。

（77）『宋大詔令集』七〇、「蔡京守本官致仕御筆」（宣和二年六月二四日）。

（78）後のことではあるが蔡絛が出版した『西清詩話』が、蘇軾や黃庭堅の作風を重んじているとして、蔡攸が弟を彈劾し死に至らしめようとした事件も起こっている。（『九朝備要』二九、宣和六年一二月、蔡京落致仕領三省事の項）

（79）『九朝備要』二八、政和七年一一月、詔蔡京五日一朝の項の注に引く蔡絛の『別錄』は、蔡京が、童貫の主張する開戰に反對し政權中樞から、引き離されてゆくさまが描かれているが、著者陳均は「恐未必然」とコメントしている。また、『宋史』四七〇、王黼傳を參照。

（80）かれらは、神霄派の進出に一役買った人物であった。王黼「宣和殿降聖記」には、「歲在丁酉、皇帝乃悟本長生大帝君」（『紀事本末』一二七、道學、政和六年十月甲申）とあり、王黼が神霄派の言説を使っていることが明らかである。丁酉は政和七年である。蔡攸は、天神の降臨を見て報告している（『十朝綱要』一七、政和三年一一月癸未）。『宋史』四七二、蔡攸傳には、「帝留意道家者說、攸獨倡爲異聞、謂有珠星璧月、跨鳳乘龍、天書雲篆之符、與方士林靈素之徒爭證神變事。於是神霄・玉清之祠徧天下、咎端自攸興矣。」とある。

（81）『十朝綱要』一八、宣和三年十月丙辰。

（82）『十朝綱要』一八、宣和三年一一月戊寅。

（83）唐代劍氏前揭「論林靈素創立神霄派」は、この問題を論じている。

（84）『九朝備要』二八、政和六年二月、上清寶籙宮成の項には、「…作上清寶籙宮、宮中山包平地、環以佳木清流、列諸館舍臺閣、多以美材、爲楹棟、不施五采、有自然之勝、上下立亭宇、不可勝計。」とあり、艮嶽が、寶籙宮の中に作られたという表現になっている。

（85）『九朝備要』二八、政和七年一二月、作萬歲山の項に、「宣和四年始告成」とある。

（86）『紀事本末』一二八、萬歲山、政和五年九月甲辰の條引用の蔡絛の『宮室苑囿篇』には「始名鳳皇山、故有閣曰巢鳳。後神霄降、其詩有「艮嶽排空霄」、因改名爲艮嶽。及南山成、又易名壽嶽。」とある。

（87）『誠齋集』一一四、所收『詩話』にこの題名が見える。

『四部叢刊初編』に所收の汪藻『浮溪集』にはこの文は收められていない。

(88) 高木森「道教與宋徽宗的藝術」(『故宮文物月刊』七・二、一九八九)は、艮嶽と道教との關連を指摘しているが、宮殿等の名稱を、その理由としているのみで、神霄派との關連は指摘されていない。

(89) ミルチャ・エリアーデ著、風間敏夫譯『聖と俗』(法政大學出版局、一九六九)三三頁を參照。

(90) 『齊東野語』七、三贈雲貢雲には、「宣和中、艮嶽初成、令近山多造油絹囊、以水濕之、曉張於絕巘危巒之間、既而雲盡入、遂括囊以獻、名曰貢雲。每車駕所臨、則盡縱之。須臾、滃然充塞、如在千巖萬壑間。然則不特可以持贈、又可以貢矣。併資一笑。」とある。『癸辛雜識』前集、艮岳には「萬歲山大洞數十、其洞中皆築以雄黃及盧甘石。雄黃則辟蛇虺、盧甘石則天陰能致雲霧、滃鬱如深山窮谷。」とある。

(91) 『桯史』九、萬歲山瑞禽には「一日、徽祖幸是山。聞清道聲、望而群翔者數萬焉。翁輒先以牙牌、奏道左曰、萬歲山瑞禽、迎駕。上顧罔測、大喜。命以官、賚予加厚。」とある。

(92) 景龍門附近は、以前から水が豐富だった。たとえば、『宋史』一一三、禮志、嘉禮、游觀には、「(太平興國)九年正月六日、幸景龍門外水磴、帝臨水而坐、召從臣觀之、因謂曰、此水出於山源、清澄甘潔。近河之地、水味皆甘、豈河潤所及乎。」とある。

(93) 『九朝備要』二八、宣和元年九月、幸道德院觀金芝遂幸蔡京第の項。

(94) 張勁「開封歷代皇宮沿革與北宋東京皇城範圍新考」(『史學月刊』二〇〇二年第七期)。

(95) 『鐵圍山叢談』四によると、馬行街は夜市酒樓が盛んなところで、その燈火を嫌うため「蚊蚋」がいなかったという。

(96) 樓鑰『攻媿集』一一二、北行日錄下の乾道六年(一一七〇)一月一八日己巳の條には「…入順常元武二門。二門之間、過五丈河菜市橋、夷門山巷口百王宮、乃煬王毬場。親從第一指揮、舊日御龍直也。由竹竿巷口斜街入第二門。土市、馬行街、皇建院巷、德勝橋、轉太廟巷口、東行相國寺、出御街。歷廊屋三十間、過榷貨務。又廊屋七十間、中有小門。是國子監。前後御廊尙多、不知其數。投西穿門、由舊路入驛。」とある。

(97) 范成大『石湖居士詩集』一二、金水河の注には、「在舊封丘門外河中、多大石、皆艮嶽所隕。」とある。

(98) 周寶珠『宋代東京研究』(河南大學出版社、一九九二)五一六頁。

(99) 開封宋城考古隊「北宋東京內城的初步勘探與測試」(『文物』一九九六年第五期)によると、內城北壁は、他の壁に比べ、損傷がひどい。考古隊は、金代の城壁工事の影響であろうという。

(100) 『宋史』八五、地理志、京城、上清寶籙宮の項「上清寶籙宮、政和五年作、…是年十二月、始張燈於景龍門上下、

名曰「預賞」。」とあるが、『東京夢華錄』六、十六日には、「宣和年間、自十二月於酸棗門（一名景龍）門上、如宣德門、元夜點照、門下亦置露臺、南至寶籙宮。…」とあり、宣和年間から預賞や景龍門での觀燈が始まったとする。後掲する『宋史』一一三、禮志、遊觀、三元觀燈、政和五年一二月二九日の條に引用される詔によって前者の記年に從いたい。

(101) 『九朝備要』二八、政和六年二月、上清寶籙宮成の項。

(102) 『東京夢華錄』六、十六日。

(103) 『九朝備要』二八、政和六年二月、上清寶籙宮成の項。

(104) 景龍門に飾られた、元宵觀燈の具については、『靖康紀聞』（不分卷）靖康二年一月一二日に「是日、又津搬景龍門常放燈所用金燈、璢璃、翠羽、飛仙之類、赴軍前交納。蓋自月初、金人大索元宵燈燭、欲於城上作元夕。十餘日、凡在京道宮佛寺正店所有搜絕殆盡、稍不堪者輒退換。」とあることからおよその事が知れる。同様の記事は、『三朝北盟會編』七四の同日の條にもあり、こちらでは景龍門と寶籙宮から、上元觀燈の具が奪われたことが述べられている。

(105) 『清波雜志』六、初賽曲宴百韻。

(106) 「江」の附された河川名は、開封には景龍江だけのようである。この上の橋と思われる。

(107) 『鐵圍山叢談』一、には、「政和間、太上諸皇子日長大、宜就外邸、於是擇景龍門外地、辟以建諸邸。時鄆王有盛愛、故宦者童貫主之。視諸王所居、侈大爲最、迺中爲通衢、東西列諸位、則又共爲一大門、錫名曰蕃衍宅、悉出貫意。」とある。

(108) 『宋史』八五、地理志、京城。

(109) 妹尾達彦氏『長安の都市計畫』（講談社、二〇〇一）。松本浩一氏も、前掲論文「徽宗の宗教政策について」の結論でこの問題を提起している。

(110) 「略論宋徽宗時期的通貨膨張」（『史學月刊』一九九〇第二期）。

(111) 『宋會要輯稿』兵三之六～七、政和六年三月二九日の條を參照。

(112) 『宋會要輯稿』方域一〇之三二、宣和元年四月一一日の條を參照。

(113) 全漢昇「宋代官吏之私營商業」（『中央研究院歷史語言研究所集刊』第七本第二分、一九三六）。

(114) 梅原郁「宋代都市の房儥とその周邊」（『布目潮渢博士古稀記念論集東アジアの法と社會』汲古書院、一九九〇）。

(115) 『九朝備要』二七、崇寧三年九月、王厚童貫賜第京師。

(116) 『九朝備要』二七、崇寧五年一二月、劉逵罷の注には、「時京雖罷相退居賜第、然政令大綱皆與聞之。」とあり、すでにこの時點で賜第に住んでいたことが明らかである。『鐵圍山叢談』四には、「魯公崇寧末…時賜第於閶闔門外。」とある。

(117) 『九朝備要』二八、政和二年春二月、蔡京復太師、賜第京師。

(118) 『清波別志』下には「蔡京賜第在都城之東、周圍數十

里」とある。數十里とは、文字通りとると、周圍一〇キロ以上を意味し、外城郭には容れることは不可能である。城外の園林であろう。

(119)『十朝綱要』一七、政和六年一一月乙未。

(120)『三朝北盟會編』三二、靖康元年正月二四日に引用の『秀水閑居錄』と『靖康遺錄』による。

(121)拙稿「宋都開封城内の東部と西部」(『長野工業高等専門學校紀要』第三六號、二〇〇二)。

(122)『鐵圍山叢談』四には、「魯公崇寧末不入政事堂、以使相就第。時賜第於閶闔門外、俗號梁門者。脩築之際、往往得唐人舊冢、或有誌文、皆云葬城西二里。大梁實唐宣武節度、梁門外知已爲墓田矣。」とある。

(123)『三朝北盟會編』三六、靖康元年二月八日に引く『靖康錄』に「宣和中、内侍多有賜第者、官舍或隘陋、卽委府尹、於傍宅置門。然未嘗給其直而實奪之。京城百姓或有累世聚族以居屋舍、既爲奪去、則無所託身、惟與妻子日夜號哭告天而已。」とある。

(124)『玉照新志』三に引用されている『乙巳泗州錄』には、朱勔のことを「在京則以養種園爲名、徙居民以爲宅所。」と批判する。また、『清波雜志』六、東西園には、「蔡京罷政、賜隣地以爲西園、毀民屋數百間。一日、京在園中、顧焦德曰『西園與東園景致如何。』德曰『太師公相、東園嘉木繁陰、望之如雲、西園人民起離、泪下如雨、可謂東園如雲、西園如雨也。』語聞、抵罪。」とある。

(125)『宋會要輯稿』方域四之二三、宣和二年一〇月二八日、御史中丞臣翁彦國奏。

(126)『紀事本末』一二八、四輔を參照。

THE CAPITAL KAIFENG IN THE AGE OF EMPEROR HUIZONG OF THE NORTHERN SONG

KUBOTA Kazuo

It can rightly be claimed that in the Kaifeng 開封 of the early period of the Northern Song the function of the capital as the center of military power dominated spatially and visually. That is to say, it was a capital that excelled in all the worldly functions required of a capital. However, the Palace Command encampment 禁軍軍營 at its center had been greatly reduced in the military reforms of Wang Anshi 王安石. With the coming of the age of Huizong 徽宗, the supernatural, sacred functions of the capital were consolidated and spatially and visually renewed.

The transformation of the northeastern area of the old city was particularly remarkable. The Yanfugong 延福宮 was constructed in the northern part of the old city and the imperial compound was thus expanded. Then, the Shangqingbaolugong 上淸寶籙宮 and Genyue 艮嶽 were constructed on the eastern side of the area bounded by the Donghuamen road 東華門街. The latter two structures were deeply related to the Shenxiao sect 神霄派 of Daoism. In the preaching of Lin Lingsu 林靈素 of the Shenxiao sect, Huizong was the Lord of Longevity 長生帝君, who had descended from heaven. Huizong planned to utilize such preaching to enhance his authority. The Shangqingbaolugong was the temple where the Shenxiao conducted rituals, and the Genyue was the facility where the god would descend. In other words, the reorganization of space was the product of Caijing 蔡京, who attempted to strengthen his power base and expand the authority of Emperor Huizong, and the political activity of his sect. The palace was linked to the Shangqingbaolugong and the Genyue via a special road upon the Jinglongmen 景龍門, a device to permit Huizong to travel easily between the secular and sacred realms. He enhanced his authority by being simultaneously both the emperor and Lord of Longevity.

The road that went north out the Jinglongmen was the central axis of Kaifeng in the time of Huizong. The Shangyuanguandeng (Lantern Festival) ceremony in particular was conducted there with great pomp. The torches were lit to ornament the Jinglongmen from the twelfth month, prior to decoration of the main gate of the imperial compound, and the prohibition on night-time excursion was lifted on

the Donghuamen road below the Jinglongmen, and an all-night market was given special permission to operate. The joint participation of the ruling class, including Huizong, and the common people in this ceremony was devised to heighten consciousness of prosperity of the realm and the authority of Huizong and the Northern Song regime.

ON THE PROMULGATION OF WRITTEN EDICTS IN THE YUAN PERIOD

FUNADA Yoshiyuki

The age of Qubilai was a turning point in the bureaucratic administration of Mongol rule that controlled the better part of Eurasia in the 13th and 14th century. While carrying on the system that he had inherited, Qubilai advanced the establishment of system of bureaucratic administration in one stroke by formalizing written edicts in the Mongol language, and a style of Chinese meta-phrased from Mongolian 蒙文直譯體, systemizing the 'Phags pa script, and establishing a system of instruction for language and writing. In other words, he constructed the unique bureaucratic administrative system of the Mongols in which the edicts of the *qaγan*, called *shengzhi* 聖旨 in Chinese and J̌arliγ in Mongolian, which were uttered in Mongolian, crowned the hierarchy that encompassed the complex Chinese system of official documents. This study focuses on the act of promulgation, unsealing and reading out the edict, *kaidu* 開讀, an important step in carrying out bureaucratic administration. The act of *kaidu* dealt with in this study refers to the unsealing and proclamation of written words such as the *qaγan*'s edicts at their place of proclamation.

In this study the form and procedures of the act of *kaidu* as well as its historical context have been considered, and the following matters have been clarified. The regulations of the ceremony and procedures of the promulgation of *zhaoshe* 詔赦, as the *qaγan*'s edict of amnesty was called in Chinese, have been verified, demonstrating that personnel well versed with the Jin system were involved at the stage of creation, and the contents generally mimicked those of the Jin of system. This type of system consolidation was a part of the nation building developed on a wide scale following the enthronement of Qubilai. I have made clear the specific aspects of the procedures of the ceremonial program of which the *kaidu* was a part, including the fact that personnel of the local government